

# 異業種3社で開発、遠隔橋梁点検車「橋竜」



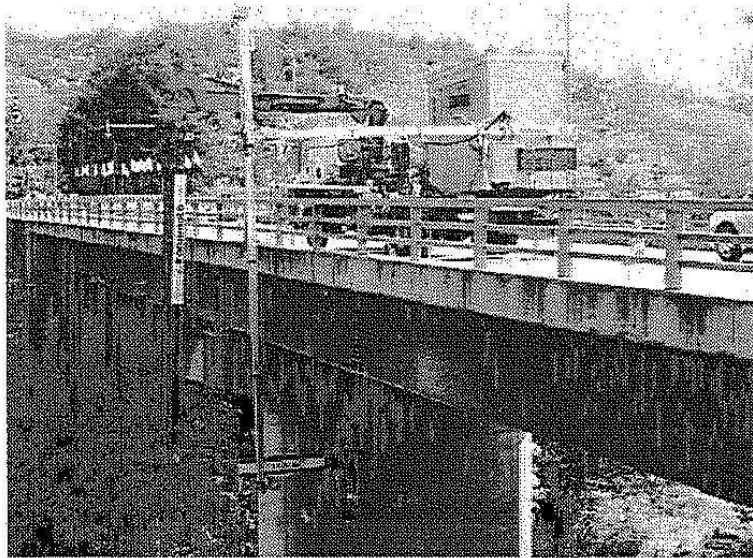
須永俊明  
専務執行役員

「橋竜」は2人のオペレーターが乗り込んで橋の上に止まり、アームを伸ばして橋の裏側や橋脚に損傷がないか点検する。先端に監視カメラが取り付けられた長さ約20メートルのアームは四つの関節を持ち、伸縮する。足場を組んだり、作業車のゴンドラに人が乗り込んだりして行う従来の

札幌市内の異業種3社が共同で開発した遠隔橋梁点検車「橋竜」が、来年4月から実用化される。恐竜は太古に絶滅してしまっただが、新生「橋竜」は、公共事業の厳しい環境を逆手に取り、長い首を伸ばして橋の下をのぞき込む姿が全国で見られるようになるかもしれない。  
(三宅範和)

## わたしの プロジェクト 北海道

# 長い首曲げ橋の診断



## 補修工事にも応用可能

点検に比べ、安全で手間や費用もかからない。カメラによる画像データと運動しているたぬき、時間を経ても非常に正確な定点点検が可能で

帝国設計事務所 74年設立。橋・道路・上下水道の設計、橋の残り寿命や耐力の診断などを手がける総合建設コンサルタント業。「橋竜」の開発で、06年度の道新技術・新製品開発賞奨励賞を受けた。菅原義昭社長。資本金4700万円。札幌市東区北25条東12丁目1の12(011・753・4768)。

経年変化を観測できる。4トトラックがベースなので、特殊な免許や許可がなくても一般道を走れ、機動力も十分だ。橋の点検診断にノウハウを持つ帝国設計事務所を中心に、制御システムを担当のエルムデータ、建機レンタル大手で重開発と実用後の営業力を期待されたカナモトの3社で開発した。開発プロジェクトの責任者で帝国設計の専務執行役員、須永俊明さん(56)は「国や自治体の財政難で、一度架けた橋は、点検と補修工事をして長く使う時代になる。高度成長期に架けられた橋が築後40〜50年を経過するので今後、点検の需要が膨らむ」とみる。03年度に開発に本格的に着手。実用機は来年3月に完成する予定だ。

当面は、オペレーター込みのチャーター方式の営業だが、将来は、「橋竜」単体でのレンタルや販売も見込む。須永さんは「橋以外にも、岸壁などの点検にも使える。カメラを工具に付け替えれば、補修工事や塗装にも応用できる」と未来に思いをはせる。

遠隔橋梁点検車「橋竜」(試験機)による橋の点検作業の様子

ほっかいどい